随想

秋祭り

山下利夫

秋の収穫祭をひかえて、黄金色の稲田の向うの鎮守の森から夜毎きこえる神楽の練習の笛、太鼓の音を耳にするとそぞろ秋深まるの感がする。

子供の頃は、あの笛、太鼓の音を聞くと、鎮守さまの祭りの日を指折り数えて祭りの日の楽しさを語り合ったものである。御輿の先導をする奴のひょうきんな行列、御輿に供奉する甲冑武者のいかめしい姿、天狗や憤怒の姿をしたお面、ささらでひっぱたかれて参詣の人ごみに暴れこむ神馬の群、恐怖の世界に引きずりこむようなどらの音につれて乱舞する獅子の大きな口、長い長い首を伸したり縮めたりして、大きな胴体の調子をとりながら、馬場通りいっぱいに馳けまわる大神亀の面かまえ。

神幸式の出しものは、そのどの一つをとっても子供心をゆすぶり、スリリングな印象を与えないものはなかった。

常日頃はさしてつながりもない鎮守さまも、夏と秋の祭りでは、すっかり氏子の心をとらえ、氏子もまたこの祭りで鎮守さまの存在を意識したのはただ、わたくしたちの時代だけのことではなく、恐らくわたくしたちの祖先の全ての人たちもまたそうではなかったかと思われる。

だが、戦後二十年。鎮守さまの祭りも、形質ともに、すっかりその様相を変えてしまった。神輿をかつぐ肩の痛さ。若い世代の人たちには祭りの不合理性のみが目につき、肩にしみこみ、皮膚に感じられた。

そして鎮守さまには更に受難の日が待ちうけていた。農業の機械化で十数頭の神馬をかり集めるのにさえ次第に困難さが加わってきた。

はじめの間は古老の説得で、何とか借馬して、間に合わしてきたが、遂には三カ町村の氏子中農耕馬を所有しているのはごく数えるほどになって神馬の奉納はできなくなってしまった。これがきっかけとなって、獅子も奴も亀も若い人にはなり手がなくなった。

このことは、『神々の没落』として、古老を悲しませたかもしれないが、若者の目には『当然』の姿としかうつらなかった。

それでも、氏子総代などという地位にある人たちからすれば、この「神々の没落」は拱手して傍観するわけにはいかなかった。神馬がいなくなったら代りに耕耘機のパレードをしたらどうであろうかなどという妙案もでたが、これも沙汰止みとなった。そうして何が何でも祭りには人集めが一番だということで、少年相撲大会がグッドアイデアとしてデビュウすることになった。これには地教委からの横槍が入ったが「神々の没落」には代えられないとして、強行……。だが現代っ子達は郷土の横綱を夢みて、テレビの力士よろしく敢闘して、奉納の重責を果した。しかしながらこの妙案も二年にして終焉を迎え、今年の祭りは、しめやかな神幸式となりそうである。

このような世代の移り変りの中にあって、ただ一つ特記したいことがある。それは本町（八代郡宮原町）の鎮守さまの子供神楽は県の無形文化財として指定されている『肥後神学』の末流であって、全国に非常に珍らしい伝承芸能（小学校二年から六年までの男子児童）であり、この保存については県広報課の立石俊一氏の尽力によるところが多いので特に付記したい。

「神々の没落」はただ本町だけに起った現象ではないようである。全国町村の鎮守さまは大なり小なりこのような傾向にあるのではないかと思う。

（鎮西高校教諭）

私のたべもの

松下アヤコ

ことしの夏もまたきびしい暑さの連続であったが大学の研究室では夏休みを利用して例年のように卒業論文のための実験研究がつづけられてきた。普通の日は学生への講義、実習などのために自分の研究時間に恵まれない私にとっては夏休みは猛暑とはいえ恵まれた研究のチャンスである。学生にとっても受講のない夏休みは卒論作成のためのチャンスなので私も学生もできるかぎりがんばってきた。

ところがこの猛暑中の連続の研究生活の中に私はおもしろい一つの現象を見出した。このことは本年始めて気がついたと云ふわけではないが若い学生の方が私より早く疲労し暑さにまけ、長くつづけての研究には耐え得ないことである。もっとも研究にたち向う者にはそのテーマに対する研究意欲、情熱の程度が問題であることはもちろんであるが、何と云っても研究生活の根本をなすものは健康であることが第一の条件であるだろう。室内32度以上の暑さの中で汗をふきながら毎日7時間余の仕事をすすめているがそうひどくつかれるとも思われない。やはり毎日の私の食事がそのような体の条件を作り出す一つの原因であるだろうか。

私は主食をあまり多くとらないで足りないカロリー、蛋白質は「おかず」からとっている。生野菜、果物、牛乳、卵黄は毎日とり、砂糖、甘味剤の入ったお菓子類、のみものはあまりいただかない、朝食のみそ汁には新鮮な野菜二種類位を入れる。みそ汁の中に「コロカルソ」を入れるとよいが、私はその代りに牛乳をのむ。その他卵黄1個、大根おろしかその他の生野菜をとり、浅草のりか又は昆布の煮物をわすれない。

昼は食パンに一〇㌘位のバターをつけ、牛乳一本、チーズ、果物を食べる。砂糖、色素の入ったパンジャムなどはいただかない。（ネズミを用いて動物実験した結果からみれば、食パンに砂糖をつけて与えた場合には成長がすすまず皮膚がたるんで脱毛がはげしく、生命の維持さえあやぶまれたが、同じ食パンにバターをつけて与えた方は体重もぐんぐん増加し、見事に成長した事実をみて以来私はこの方法を実行している）

夕食には魚、獣肉、レバー、豆製品の何れかを量が多くなりすぎぬように、焼くか、又は植物油であげて植物油の摂取もわすれない。大根おろしは油物の後には必ずいただくが、その他の生野菜はサラドにして毎日いただく。油脂類摂取のことで思い出したが先日女大卒業生で農業高校の家庭科の先生にお会して色々のお話をうかがったが農村家庭からの生徒達は油を使用した料理をあまり好まないそうである。全国の栄養調査の結果からみても油脂の摂取量は基準量を下廻わっているのでこれは全国的な問題であるが要するに子供達が油脂料理を好まないのは幼少の頃からの家庭の食習慣にその原因の一部があるとも考えられる。家庭の食生活を主宰するお母さんは、油脂料理をすることによって、でんぷん性食品の摂取量を少なくし、油脂料理を好むような育て方をすることは将来の日本人の健康増進の上に必要な望ましいことがらであろう。

油のことで長くなったが私は加工された食品をあまり使用しない。このことは家事労働の社会性を阻止する消極性を持つが現在の段階では防腐剤、甘味剤、色素などの関係で十分な安全性を期待出来かねるからである。安心して使用される時期の早来する様努力をつづけるつもりである。

（熊本女子大学助教授）

阿蘇と私

宇野千里

私がはじめて阿蘇にキャンバスを持ちこんだのは大正一四年、美校二年生の夏休みのことだった。垂玉温泉に泊りこんで、毎日三〇号をかついで高原を描いたけれど、未熟の私は緑一色のはげ山をもてあまして、遂に物にならなかった記憶がある。

その後は夏の阿蘇にこりて足を向けなかったが、或る人に阿蘇五岳の絵を描くようにすすめられて、冬の阿蘇を内牧方面で描くことを覚えた。

泊りがけの時は一泊三食で一円の米屋旅館を常宿にした。日帰りの時は内牧駅から乗合馬車を利用した。

温泉町から西北部の外輪山麓に玉藻の池と呼んでいたところで描くことが多かった。ここは個人の所有地であったらしく、池辺の杉森は戦時中に伐りはらわれて、今は見るかげもないそうである。昭和五年頃の一月、二月頃によく雪がふって見事な阿蘇の五岳を見た。それを描いたのも玉藻の池の畔りからであった。その作品は県庁が燃える時運命を共にしたらしい。

その頃は熊本駅を早く出発、赤水駅で途中下車して杵島、往生岳などの風景を描き次の列車で内牧にゆき日の暮れるまで描いていた。帰りの乗り合馬車にはいつも間に合わなくてとぼとぼと駅まで六粁余を歩いたものだった。

同じ年の秋のこと、内牧の元町長佐藤さんのお宅に滞在して大観峯に日参したことがあった。阿蘇の雲海を描きたかったので毎日未明に起床して前夜用意してもらった握り飯をかじりながら一直線に外輪山の近道を急いだけれど、いつも途中で夜が明けて目的を果さなかった。しかしリュックを背に負いキャンバスを片手に南の尾根づたいに大観峯の頂上へ登り降りするなど、嘘の様な馬力を出したのはその頃のことである。

昭和八年以後終戦末まで阿蘇とは縁が切れていたが、二三年頃から又阿蘇通いをはじめる。二月の一八日と覚えているが、雪晴れの見事な阿蘇山を一二号に描いた。内牧駅から線路添いに二キロばかり東によって描いたのだった。

二八年熊本市に住んでからは便利でもあり阿蘇通いもしげくなる、二重峠から見る鳥帽子、杵島、往生方面の夕映えは絶景の一つにあげたい。その頃麓にY・M・C・Aのキャンプが建って、クリスマスの前夜泊めてもらったとき確認した印象である。

三〇年の師走から翌年の正月にかけてよく雪が降った。連日、私は赤水に通って外輪山をかいた。今国鉄線路との立体交さのある近所が私の画架をすえた場所である。雪景をかきに出かける時は防寒帽ではおを包み、両ポケットには懐炉をおさめ、手袋、外套、長靴という山男然たる服装なので軽い吹雪など平気であった。パレットに積る雪を打ちふるい乍ら描いた作品は割と快心の作が多い。

或る日赤水駅に下車したものの、余りの吹き降りに、待合室でガラス戸越に二重峠や、駅前の通りを描いたこともあった。駅長公舎の湯殿の影で吹雪をさけて描いていたらそれに気づいた奥さんが七輪を持ち出して来て足もとにおいてゆかれたことなどもあった。アルバムをめくると尽きぬ思い出が次々とわいて楽しいものである（画家・光風会々員）